

石脇慶總著『神秘との合一を求めて —— J. マリタンにおける神實在の認識に 関する研究』南山大学学術叢書

(エンデルレ書店・1994年・307頁)

石橋 泰 助

本書は、今世紀有数のカトリック思想家であるジャック・マリタン (Jacques-Aimé-Henri Maritain 1882-1973) の思想の中心点が神實在の認識という問題にあることを看取し、長年同じ問題を思索してきた著者が、マリタンの諸著作の中に表されたいわゆるネオ・トミズムの認識論と神認識の構造とを総合的かつ詳細に分析し、マリタンの思想が今日においても神の實在を論証し、かつ哲学的無神論を説破するために極めて有効であることを検証した労作である。

本書は、序論に続く五つの章と総括的結論から構成されている。著者自身が序論の中で各章の概要を紹介し、かつ各章でももに使用されるマリタンの著書を上げて簡単な説明を行なっている。第一章「J. マリタンにおける認識理論一般」の中で、著者は、マリタンの認識論の基本構造を概括している。本章は、トマス・アクィナスの認識論と、そのマリタンの解釈との要点を知るのに大変適切なガイダンスとなっている。第二章「思弁の領域での、神からの道」で、著者は、神の体験的直観のいわば基礎となっている〈実におよび認識〉の直観的把握の構造を分析している。著者によれば、精神は、實在の働きそのものゝ直観を通して、また認識の働き (著者は、それを認識者の漲溢實在 *surexister* として成り立つとする) の直観を通して、すでにその働きの根源となっている漲溢實在者 (神) そ

のものへのアプローチを見いだすのである。第三章「実行の領域での、神からの道」では、前章での基礎的分析に基づいて、人間の具体的な体験の把握、すなわち倫理道徳的体験、詩的体験および神秘信仰体験における直観的把握の構造の分析が扱われる。著者は、人間がこれらの体験を通して、善そのもの、美そのもの、超越者そのもの (著者は「空虚」と表現する) のある種の把握に到達すると述べている。第四章「哲学的領域での、神への道」では、神實在の哲学的証明に関するマリタンの理論が考察される。著者は、マリタンのデカルト、カントおよびベルグソン批判、ならびにトマス・アクィナス注解を概括し、これに著者自身の批判を加えた上で、神實在の哲学的把握が前の二つの章で述べられた直観的・体験的把握の明証化 (著者によれば「再・認識活動」) に外ならないと論じている。第五章「神についての認識の否定、無神論の問題」の中で、著者は、現代の無神論の諸相とその論拠をマリタンの著述に沿いながら考察している。著者によれば、無神論には実行的無神論、絶対的無神論ならびに疑似無神論の三種類が認められるが、あらゆる神的存在を人間から排除拒絶し、かつ人間を歴史という盲目の神に従属させようとする絶対的無神論こそがマリタンの言う「完璧なヒューマニズム」によって克服されなければならない課題なのである。最後の「総括的結論」の中

で、著者は、以上の論旨をもう一度概括し、考察を加えている。この結論は、本書が現代無神論の克服という動機から生み出されたものであることを窺わせるものとなっている。著者は、トマス・アクィナスを基礎とするマリタンの深い洞察には、現代無神論を克服するに足る哲理が提示されているが、しかし単なる理論的克服では無神論の問題の根本的解決にはならず、むしろキリスト者自身の「知的、社会的生命全体を改革すること」(190頁)が必要である、と力説して本書を締括している。

本書の論述方法を見ると、マリタンの認識論一般の分析紹介から始めて、しだいに神認識の方法論にテーマを絞り、最後に現代無神論の拠って立つ哲学的論拠を明らかにして行く、という手法をとっている。著者は、マリタンの思想の核心点を、その哲学的基盤に沿って剔出し、かつ著者の論点に従ってこれを配列記述するという方法を採っている。しかし、著者は、単にマリタンの理論を再構成するに留まらず、いろいろな箇所でもマリタンの神認識の理論を批判的に検証している。たとえば、本書78頁で著者は「但し、マリタンのこの『第六の道』は、非常に高度の抽象性と微妙な概念区別・操作を要求している。従って、その理解は必ずしも容易ではない。結局、マリタン自身は認めないであろうが、神の内における人間ペルソナの(個体的)知性の超時間的な先行存在を容認する、敢えて言えば、オリゲネスの靈魂先在説に陥る危険を孕んでいるのではないだろうか。何故なら、被造物による共有可能性としての神的本質、或は、受け取られた志向的実有と言う考えは、容易に観念化され、それ自身の『世界』を形成しがちだからである。」

と述べており、また182頁では「その上、『諸事物』や、考える『私』、そして、一般に、『主体』が、どの様にして、神の内に、自分自身に対して先在することが出来るのか、「証明」しなければならないであろう。マリタンの答は、『現時点で私であり、且つ、考えつつあるところのこの被造物は、……神から考えられたものとして……神の内に、永遠に自分自身に対して先在していた』と言うことであるようだが、私見では、理解し難いように思われる。『神から考えられたものとして』在るのは、諸事物の理拠であろう。即ち、被造物から無限に参与可能なものとしての神的本質自体であり、それは、神的本質自体そのもの以外の何ものでもない。従って、どの様にして、『私』は、神の内に先在していた、考えつつある主体、「行なう働き」の能力を備えた自己が、神の内に、自分自身に対して先在している、と主張し得るのだろうか。ここには、恐らく、主体性自体と自存性との秘義が関わっているであろう。……とにかく、この漲溢実在の働きについての直観の内に、神の実在についての『殆ど直観的認識活動』が必然的に含まれているかどうかを知り得るには、更に、検討を深めねばならないであろう。そして、私見では、解決の糸口は、『共有』と『自存性』とに関する徹底した探求に見出されるのではないかと思う。」と述べて、マリタンの理論に対する著者の批判的見解を披瀝しているのである。

さて、本書の中心テーマは、表題に示されたように、如何にして「神秘との合一」が成り立つか、という問題であるから、この点についての著者の見解を概観しておきたい。著者は、Deusを「神」と置き換えることに納得せず、敢えて表題

には「神秘」を使用しているが、本文中ではほとんど「神」を用いており、その理由を注の中で説明している(193頁)。「合一」について、著者は、マリタンの一文を引用した後で「この固有の实在活動とは別の实在活動をマリタンは、实在活動の豊かさの溢れという意味を込めて‘漲溢实在の働き’と呼ぶが、この新しい实在活動によって、対象の此方の主体は、その固有の本性を失わないで、或程度まで、対象の彼方の主体となり、かつそれであることになる。それ故、認識活動は、対象の此方の主体と対象の彼方の主体との単なる接合ではなく、『或第三のものを一緒になって構成する形相と質料との合成よりも遙かに優れた合一』(“Distinguer pour unir ou Les Degrés du Savoir”, p. 229)であり、二つの主体の交わりである。」(31頁)と述べて、形相と質料との合成よりも遙かに優れた合一が認識活動における認識する主体と認識された主体との間に存すると説明している。つまり、著者は、神を認識することと、神と合一することとは同義であるとしているのであり、この立場に立って次のように述べる。「この無限に隔たる二つの‘主体’は、どの様にして、『合一』し得ると考えることができるであろうか。吾々は、吾々の『認識活動』によって、どのような意味で『神』となり、『神』であり得るであろうか。」(179頁)。ここから、「神秘との合一」とは「神との認識活動における交わり」を意味していることが分かる。著者は、総括的結論の中で、それまで列挙してきた認識活動を再吟味しつつ、意識以前の精神活動のうち实在の働きについての直観に関して次のように述べている。「この直観の無媒介の相関項は、有限の事物の‘实在の働き’そのも

のである。この直観において精神は、意識の次元で、实在の働きそのものに『なる』。しかも虚無同伴の存在態として、起因された限りにおける实在の働きに『なる』のである。ところで、存在論的にみれば、起因された限りにおける实在の働きには、それ自身の内に、‘自存する实在の働き自体’に対する必然的なつながりと、自己の第一原因としてのこの实在の働き自体に対する必然的依存関係とが含まれている。」(181頁)。また著者は、漲溢实在の働きについての直観に関しては「この直観の証明力が、堅固に確立された暁には、この道は、存在態の客体的側面からよりも、その主体的側面から一層心を惹かれる現代人の心性を神の实在の認識にまで導くに際して、非常に優れた道になると思われる。この道は、亦、現代観念論の中に含まれている本物の、正当化できる諸々の要素の大きな成果として認められることになるだろう。」(182頁)と述べている。こうして、著者は、实在の働きについての直観が最も確実な神認識の道であり、漲溢实在の働きについての直観も、まだ探求の余地があるけれども神認識の優れた道であり、三つの体験的認識および哲学的認識には、实在の働きについての直観ほどの自明性はないが、やはり神認識の道と認めることができる、と結論づけている。なお、著者は、「マリタンの果たした実り豊かな研究は、恐らく、ただ単に人間の自然本性をより良く理解するためだけではなく、更に、人類の二つの偉大な思潮の相互接近、若しくは、総合のために、西欧の文化と、インド、中国、韓国、日本などの所謂東洋の文化との交流のために、大きな貢献を遂げるであろう。」(186頁)と述べて、本研究が単に西欧思想の研究にとどまる

ものではなく、東洋思想の研究のためにも意義あるものとなろう、との展望を示している。

本書の難点を敢えて指摘すれば、哲学的著作という本書の性格上やむを得ないことではあるが、本書は読者にかなり難解な印象を与えるということである。しかし、その理由は、哲学書という内的要因とは別に、スコラ学的概念に対応する日本語が少なくかつ定着していないという現状にあるのであり、さらには著者による独自に工夫され創作された用語の使用にもあろう。幸い著者は、マリタンの著作を参照するに当たって、注に原文と邦訳を上げており、さらに巻末には語彙仏和対照表を付しているのので、これらを照合しつつ味読するならば、本書の内容を正確に把握することはさして困難ではなくなるであろう。

本書の意義としては、以下の点を上げることができる。まず、学問的な面において、本書は、第一章でマリタンの認識論を紹介しているのので、マリタン哲学に触れたことのない読者でも、トマス哲学をベースとしたマリタンの哲学的基礎理論を学ぶことができるということである。つぎに、本書は、マリタンの著作がまだ数冊しか翻訳されず、マリタンに関する研究書も比較的少ない日本において、マリタンの中心思想に肉薄し、これを批判的に再評価することによって、日

本におけるマリタン研究に貴重な足跡を残すものとなるであろう。さらに、本書は、前述のように著者がマリタンの思想を日本語化するに当たって独創的訳語の使用を試み（例えば、sur-漲溢 [的]、connaturalité 共本性態、spécifier 徴表化、mysticisme, mystique 神秘信仰体験、intentionelle 意識次元の、など）、さらにマリタンの著作からかなり多くの箇所を邦訳して引用または参照し、豊富な注を設けて本文を補い、これによってマリタンの思想の、強いてはトマス哲学の日本語による理解に対して少なからぬ貢献を果たすものとなっている。また、思想的な面においては、無神論的世界観を基盤とした共産主義政体が崩壊したとは言え、今日なお無神論の原理が自然科学を初め、医学、政治、経済等の人間のあらゆる知的活動を根本的に支配している状況において、本書は、無神論思想の淵源を指摘すると共に、マリタンによって再構築されたトマス哲学によってこれを打破する論理的基盤を提示し、思索する人々に超越的実在への道を示す役割を果たしうる、という点を指摘することができよう。

著者の長年にわたる地道にして真摯な研究が活字となり、神を探求する日本のすべての思索者が著者の得られた成果を共有できるようになったことは、誠に喜ばしいことであると思う。